



●2023 年度色彩教材研究発表会報告

去る3月16日、2023年度色彩教材研究発表会が日本橋のDIC本社において、数年ぶりに対面（zoom併用）で開催された。

第一部の研究発表では、昆野照美幹事がカラーユニバーサルデザインにおける明度と彩度に関する基礎研究を、小粥将直氏が世界でも類を見ない色覚シミュレーションツールを、藤野悠氏が色の調和的配置のパターン化という挑戦的研究を報告された。

第二部では、DICグラフィックスの秦野哲洋氏から、同社の色見本帳『DICカラーガイド』のデジタル版アプリの内容・使用法・今後の展望を、詳しくお話しいただいた。

第三部では、初の試みとして7名の発表者が展示物を前に行う「ギャラリートーク」が実施された。この発表形式は、発表者と聴講者が共に教材を直に手に取り密にやりとりできる点で、教材研にこそ最適と確信された。

本年度でも、研究会会員により制作されたさまざまな色彩教材の実物をイベント会場に持ち込み、展示をするとともに、教育の現場を実演していただいたり、参加参加できない人は他の参加者に依頼して紹介して、活発で率直な「ギャラリートーク」の場が提供されるよう企画していきたい。（山根千明）

源氏物語の色 -50 「早蕨（さわらび）」

姉・大君が亡くなった翌年の二月、中の君は、喪が明ける除服（じょふく）の禊（みそぎ）の頃を迎えていた。

近親者が死去した際、一定期間謹慎する服喪の期間は、当時の律令によって、父母・夫の場合は一年、祖父母・養父母は五カ月、妻、兄弟姉妹嫡子は三カ月と定められていた。服喪中は、喪の程度に応じて、黒、鈍色、薄鈍色（薄墨色）と喪服の色の濃さを着分ける。濃い色ほど、喪は重く、弔意の深さも表した。

また、御簾や几帳などの室礼（しつらい）も鈍色の服喪用のものに替えて過ごした。

この場面では、三カ月という定められた期間は短く、もっと濃い色の衣を着て喪に服したいがそういう訳にもいかず悲しいと中の君の亡き大君に対する想いが記されている。

同じ頃、その高貴な立場上、結ばれた後も、宇治で暮らす中の君を都へ移すことができぬまま、過ごしていた匂宮は、ついに都の自邸、二条院に迎える決意をする。色とりどりの美しい衣など京に移るための品々や車が中の君の元へ届き、女房たちは上京の喜びに湧きたつ。想像されるその彩りとは対照的に中の君は、亡き父や姉と暮らした宇治を離れるわが身を嘆き悲しむのであった。（平山和香子）

●万葉集のなかの色 -6

万葉集の和歌の、長歌、短歌、旋頭歌、片歌の四形式の内、長歌は五音と七音の二句を三回以上繰り返す、最後を多くは七音で止める形式である。現代の詩や歌詞に近い。

旋頭歌は五七七五七七の三十八音、片歌は五七七の十九音の歌である。短歌は五七五七七の三十七音で、現代まで残り隆盛している。

田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ
不尽の高嶺に 雪は降りける

山部宿禰赤人（巻3-318）

真白という色を強調した表現が見られる。

あおによし 寧楽^{なら}の京師^{みやこ}は 咲く花の
薫ふがごとく 今盛りなり

太宰少弐小野老朝臣（巻3-328）

青山の 嶺の白雲 朝に日に

常に見れども めずらし わが君

湯原王（巻3-377）

わが屋戸に 韓藍^{かんらん}蒔^まき生^なし 枯れぬれど
懲りずてまたも 蒔^まかむとぞ思う

山部宿禰赤人（巻3-384）

「あおによし」は「青丹吉」と書き、奈良の枕詞。「韓藍」は鶏頭で、この藍は「紅」の色を意図しての表現とも考えられる。

* 講談社文庫・中西進・万葉集から（永田泰弘）